

～デジタル化の波を捉えて～

新たな情報発信への取組み



アジ研でも「デジタル時代」に応じた情報発信を強化していますが、具体的にはどのような取組みをしているのでしょうか？

2016年、日本政府よりオープンサイエンス推進の基本方針が示されたことを受け、アジア経済研究所でも研究成果の発信は電子媒体の無料公開を原則とすることを決定しました。以後、同方針のもと、研究所ではオープンアクセスポリシーを策定し、ウェブ・マガジン「IDE スクエア」の開設、各種刊行物の電子媒体への移行と機関りポジトリの整備などを進めるとともに、SNS や動画を活用した情報発信やセミナー・講演会等のオンライン配信を開始しました。思いがけず 2020 年に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延は、社会全体のデジタル化を加速させましたが、アジ研でもオンラインによる講座や会議を多数開催するなど、情報発信のデジタル化をより一層加速させています。

ウェブ・マガジン「IDE スクエア」

<https://www.ide.go.jp/Japanese/IDESquare.html>



IDE SQUARE



『IDE スクエア』は研究所の研究員・職員が中心となって執筆している公式ウェブ・マガジンとして、2017年11月に開設されました。取り上げるテーマは、アジアの時事問題解説だけでなく、研究所が研究対象とする国・地域における人々の日常生活に密着したもの、またトップジャーナルから途上国に関する面白そうな論文をピックアップして紹介するもの、高校生からの素朴な質問に研究者が答えるコーナーなど、まさに多種多様。書き手の専門性を発揮しつつ、幅広い層にとって読みやすい記事が好評で、今では発展途上国・新興国の「今」を伝える研究所の代表的なオウンドメディアとして、多くの愛読者に支えられています。



▲『IDE スクエア』には、読んで楽しく、ためになるコラムがたくさん。



▲『IDE スクエア』ウェブページ。

オープンアクセス / 電子書籍

<https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish.html>



アジア経済研究所の研究成果は、2020年度から、従来の紙媒体に代わり電子単行書 (eBook) での発行に移行しました。第5章でも紹介したように、その背景には、学術出版界でオープンサイエンスという大きな潮流があったのです (90 ページ「9. 研究成果のオープンアクセス化」参照)。

現在、eBook 版は、研究所ウェブサイトの出版物ページから全文無料でダウンロードできます。また、「POD (プリント・オン・デマンド) 方式」による冊子体も 1冊ずつから注文可能で、読者が好みの形態で本を読めるようになりました。



SNS



Twitter 公式アカウント

https://twitter.com/ide_jetro



アジア経済研究所公式 Twitter アカウントは、2018年10月から「中の人チーム (SNS 投稿担当チーム)」での運用を始めました。それまでは、ウェブページ更新時に URL とタイトルを自動投稿する機械投稿型の運用を採用していましたが、「中の人」によって投稿される柔らかくて親しみやすいツイートは、さらにより多くの Twitter ユーザーの目に触れることとなりました。情報が溢れている現代社会の中で、少しでも発展途上国・地域の情報に興味を持ってもらえるよう、限られた文字数の中でさまざまな工夫をしています。



動画配信



YouTube 公式チャンネル

https://www.youtube.com/channel/UCaCuR_toRmt4Ww35m-at00w



▲公式チャンネル画面



YouTube 動画は撮影から編集まで職員による手作り

動画の撮影風景

研究成果のさらなる普及につなげるため、研究者そのものに焦点をあて、顔を出して自身の研究内容について説明する動画コンテンツの制作を提案したことがきっかけとなり、2019年より YouTube 配信がスタートしました。さまざまな情報が飛び交うネット世界で、正しい情報発信を行う学術機関としてアジ研の立地を固める良い手段だと期待しています。

動画作りで一番大変なのは、誰をターゲットにするか。学術界や関連業界にとっても有意義な内容を含みつつ、途上国研究に直接携わることのない方々にもわかりやすい動画を目指して、カット選びや字幕の付け方などに力を入れています。試行錯誤をしながらも、引き続きアジ研の研究者と研究活動を世の中に「見せて」いきます。

▶ アジビト



▲アジ研の研究者紹介

▶ アジジ



▲アジ研の研究者等による時事解説

オンライン講座



これまでのアジ研のイベント・セミナーといえば、伝統的なフィジカルイベント (対面開催) のみでした。コロナ禍をきっかけにフィジカルイベントの開催が困難となり、オンライン講座の開催に移行しましたが、オンライン講座に関する方針も検討もなく、ゼロからのスタートとなりました。

オンライン化に舵を切った 2020 年度のはじめは、現場の職員は、Skype はおろか Zoom も使ったことがない状態でした。当初はリハーサルを行ったり、講演者向けにガイドを作成したりと、試行錯誤を重ねました。

また、参加者が会場に集まりつつ、遠方参加者をオンラインでつなぐ「ハイブリッド方式」による会議やシンポジウムも多く開催されるようになりました。

アジ研では、今後も時代にあわせたオンラインイベントの形を模索していきます。

中国北京の会場と東京の会場をオンラインで繋いで開催した国際シンポジウム (2020年10月)



▲中国社会科学院シンポジウムの様子



会場と遠方参加者をつなぐ、ハイブリッド式会議

▲会場の様子